

歴史は語る

スタイワルト日記について

日本ルーテル神学校准教授 テイモシー・マッケンジー

一人の大変面白い昔の宣教師をご紹介します。A. J. スタイワルトという宣教師です。名前を知らない方々のために少し説明をしたいと思います。

スタイワルトは1905年(明治38年)から1952年に日本で働いたアメリカ一致ルーテル教会の宣教師で、数多くの日本福音ルーテル教会の働きに参加した重要な人物です。例えば1909年に日本ルーテル神学校の設立の際には、最初の授業がスタイワルト宣教師宅で開かれました。九州学院で、1916

発刊にあたって

教会史資料編纂委員長

青田 勇

二〇〇四年に『日本福音ルーテル教会百年史』を刊行した後、二〇〇六年度より、新たに教会史資料編纂委員会が始動し、教会史に関連する資料編纂の蒐集・確定・作成に取り組んでいます。来年の二〇一一年は九州学院が、さらに二〇一二年に東京教会が百年記念の時を迎えます。今回、九州学院の創設と東京教会の伝道に深く関係したスタイワルト宣教師の日記の紹介、東京教会の百年記念誌の進捗状況、それに教会建築を設計したヴォーリスの紹介に絞って、教会史資料編纂委員会ニュースをここに発刊することとしました。読者の皆様におかれましても、お手もとに貴重な歴史的資料や写真がございましたら、委員会にご一報いただければ幸いです。

で亡くなっており、告別式は東京ルーテル教会で行われ、お墓は多摩霊園にあります。引退後スタイワルトは1952年から1968年まで、神戸ルーテル神学校で働きました。

スタイワルト宣教師は神学生の頃から日記を書き続け、1968年までずっとこの習慣を守りました。私が調べた限りでは、1904年から1968年までの日記が存在しています。1904年から1940年の日記はまだスタイワルトの家族が持っているのですが、1941年〜1968年の日記はサウスカロライナにある南部ルーテル神学校の James R. Crumley Jr. Archies (アーカイブ) にあります。将来、1904年〜1940年の日記も南部ルーテル神学校のアーカイブに保管される予定です。

スタイワルト先生の日記の意義は、明治末期から昭和中期まで教会と日本の歴史を見た宣教師の生の声ということです。

例えば、日本ルーテル神学校の設置とその後ろにあった熊本高等予備学校についての内容が書いてあること

は貴重です。1910年には九州学院設置の募金活動のためにアメリカに帰る途中、スコットランドのエティンバラで開催された世界宣教会議に日本のミッションと教会を代表するために出席しています。

1939年から1941年の間の日本基督教団設置も課題として日記に出てきます。日米の太平洋戦争開始の時にスタイワルトはまだ日本にいたため、戦時下日本と教会生活について大変な時代の証が残されているのは印象的です。

ただの日常的な記録だけではなく、当時の宣教師の働き、外国人としての日本における暮らし、教会の働きと方針についてなどが書いてあるので、色々な側面から今日まで影響を及ぼしている大変な時代について学べる資料となっています。今でもスタイワルト宣教師の日記はアメリカと日本の共同宣教の歴史的な背景を語っている刺激豊かな資料となっています。



Dr. Stirewalt and his family

東京教会 「宣教百周年記念誌」の 編纂について

東京教会記念誌部会長
深澤孝寿

1912(明治45)年10月31日の宗教改革記念礼拝に東京教会の設立が宣言された。この史実をもとに、東京教会では2012(平成22)年10月31日の宗教改革記念日に『宣教百周年記念礼拝』を行う計画をしている。

これと並行して『宣教百周年記念誌』の刊行(10月)を目途に部会で編集作業を進めているが、この作業が遅々として進まないのは戦前の資料が教会には殆どないためである。小生が依頼を受けてからこの2年間は「教会の設立(1912年)から戦後(1946年)まで」の情報・資料の収集に時を過ごしてしまつた。

これまでに教会の牧師・諸先輩が取り組んで来られた記録を少しでも補完できたらと欲張つたためもあるが、何とかこれまでの資料の精度を上げたいとの思いから、日本福音ルーテル教

会の歴史や他教会などの記念誌の収集をお願いしてきた。

青田牧師(副議長)には、「教会草創期の年表作成」や教会広報誌「るつてる(1900年〜1972年)」のCD借用などを、マツケンジ―先生からは東京教会の歴史にかかわりの深い「A・J・スタイワルト宣教師の日記」についての情報をお聞きした。

また、1995(平成7)年に日本福音ルーテル教会の宣教百年記念東京会堂建設に際して、旧会堂解体時に得た教会資料「1928(昭和3)年当時の教会関係資料(定礎式で埋めた)が新たに加わつた。

これらの新しい資料から歴史を辿る作業と共に「初代・山内直丸牧師と東京教会の草創期」についても孫からの情報を参考にできればと考えている。

更に、既刊の資料「教会七十年の歩み」、「宣教80周年の歴史と展望」、現在の記念会堂「献堂十周年記念誌」、「本田先生御夫妻を偲んで」などがある。1965(昭和40)年以降は、教会機関紙「きずな(この7月が464号)」が教会の歴史(神の家族)を継承する大切な資料となつている。

これら資料や写真などを事業部会(現在メンバーは、編集4名、資料4名、写真4名、原稿収集2名の14名と協力者7名)で分担し、選択・確認をしながら

あつた。

1925(大正14)年から翌年にかけて、ヴォーリス夫妻はアメリカ、イギリスの諸都市を巡り、近江兄弟社の伝道事業を海外のキリスト教界にアピールしているが、その海外出張の間に九州で大きなミッションスクールを竣工している。一つは、長崎の活水女学院の新学舎である。あとの二つは、熊本のルーテル教会のミッションスクールである九州学院のチャペル(講堂)と九州女学院の本館の建築である。

1925(大正14)年2月に完成した九州学院のチャペルは、九州学院の敷地の一角、160坪の敷地に総建築面積1200坪で建てられた。堅固な鉄筋コンクリート構造によるロマネスク・スタイルの礼拝堂である。建築の総工費は3万4千ドル(当時の日本円で8万7千円)であり、この資金のすべてはアメリカの北米一致ルーテル教会からの支援金で賄われた。なお、この建築作品は日本に現存するヴォーリスによる歴史的会堂建築物の中でも、異彩を放つ作品と言つても過言ではない。

1926年5月に完成した九州女学院の本館の意匠は、活水女学院も建築したJ・H・ヴォーリスである。彼の設計図の原案は、壮大で堅固な城壁に囲まれ

「教会の歴史」をまとめる作業と「会員の声や記録(神の家族の継承)の歴史(別冊)をまとめめて行く作業に分けて実施している。

東京教会の歩みにとつて欠かせないことは、神様の「世に生きて働く」実践の歴史もある。教会付属「恵泉(六十年)幼稚園」の働き、東京老人ホームとベタニヤホームの働きも(現在共に87年)加えていきたい。

そしてできれば2013年以降の教会形成に向けての夢や希望を教員に語ってもらい、後々の教会にリバイバルとなるものとしたらと思つている。今後いろいろな方にご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

た熊本城下にある熊本の町を意識した、城郭風に凝らされていたファンタスティクなもの、木造の木組の表現を細かい部分にも残し、さらに日本瓦葺屋根を二段に掛けた独特の様式として、今でもヴォーリス建築の記念碑的作品として語り継がれている。

ヴォーリスは、設計事務所設立以来、昭和初期にかけての約30年間で、キャンパス全体の計画に及ぶものから、一部の校舎の設計に留まるものまで含めると、42校のミッション・スクールにおいて300棟余りの建築を設計している。主な教派に係る建築を列記すると次のようになる。

- メソヂスト系
 - 青山学院 福岡女学院 活水学院
 - 関西学院 広島女学院 聖和大学
 - カナダメソヂスト系
 - 東洋英和女学院 山梨女学院
 - 静岡英和女学院
- 組合教会系
 - 神戸女学院 同人社 梅光学園
 - 女子学院 明治学院 梅光女学院
 - 宮城学院 大阪女学院
 - ルーテル系
 - 九州学院 九州女学院
 - バプテスト系
 - 西南学院 西南女学院

山形政昭著「一粒社ヴォーリス建築事務所歩み」によれば、日本福音ルーテル教会に関係する建築作品は28の教会・牧師館・施設現存しない建物も含むに上り、年代順につきのようになる。

- 博多教会(1916年)、久留米教会(1918年)、東京教会(1941年)、名古屋教会(1948年)、博多教会(1948年)、広島教会(1948年)、大年田教会(1948年)、復活教会(1952年)、博多牧師館(1952年)、長崎教会(1952年)、熊本教会(1952年)、焼津教会(1953年)、岡崎教会(1953年)、京都教会(1953年)、三原教会(1953年)、市川教会(1954年)、大阪教会(1954年)、室園教会(1954年)、蒲田教会(1956年)、西宮教会(1957年)、横浜牧師館(1959年)、市ヶ谷学生センター学生寮(1960年)、京都学生センター学生寮(1960年)、宇部教会(1961年)、掛川教会(1962年)、清水教会(1965年)、小田原教会(1966年)、高蔵寺教会(1967年)

ことに、1918年に献堂した久留米ルーテル教会の会堂は、90年近くを経た現在においてもよりよく保存・維持されている。これはヴォーリス・スタイルの典型的な会堂と言えるトランス小屋組の建築様式であり、

ヴォーリス設計事務所と教会建築

青田 勇

ヴォーリス建築事務所の歴史は1905(明治38)年、米國より25歳で来日したクリスチャン建築家W・M・ヴォーリス(William Merrell Vories)が、1908(明治41)年に京都YMCA会館の設計監理を手がけたことにはじまる。1920(大正9)年にはヴォーリス、吉田悦蔵、村田幸一の3名による匿名組合として「ヴォーリス建築設計事務所」が設立された。

その後、J・H・ヴォーゲル(Vogel)等のアメリカ人建築家の協力を得て欧米建築技術の導入に努め、建築設計の業績を拡大していった。関西学院、神戸女学院、大同生命、京都大丸、その他、教会、病院、住宅などの建築物を築き、その総数は二千有余に及ぶ。

ヴォーリス自身は神学校に在籍したことも、また牧師の資格もない。さらに、建築学を大学で正課として学んだ経歴などはない。けれども、生来の天分として、信仰的情熱と美術、音楽などの芸術分野に恵まれた才能を持っていた若者で



空襲被災後の東京教会(左遠方にみえる塔のある建物) 全龍寺境内から東方を見る

昭和20年4月14日

外壁はゴシック様式によるレンガ造り。会堂の側壁窓は尖頂アーチ窓、屋根はスレート葺煉瓦建。建築総面積30坪として会堂としては小規模であるが、総工費は当時の価格で1万3千500円を要し、その大半は北米一致ルーテル教会からの支援金で賄われた。



久留米教会

市川教会

九州学院チャペル



建築家で信徒宣教師の ウィリアム・メレル・ヴォーリスについて

京都教会員 谷口 輝男

(1) 先祖

両親は、何れもイギリスの血を受け継いで17世紀アメリカ大陸にきたピューリタンであった。代々厳格な清教徒的信仰に基づく生活態度が保たれて、メレルも強い感化を受けて成長。母ジュリアンは若い頃、海外宣教の夢を抱き、オハイオのレーク・エリ神学校に学んだ。自分の子には是非、男女何れであっても海外宣教に行けることを祈っていた。

(2) 誕生から成長

1880年(明治13年)10月28日アメリカ合衆国カンザス州レブンワースの町で父ジョン・ヴォーリス、母ジュリア・メレル・ヴォーリスの長男として誕生。

2歳の時、腸結核を患い医師から回復の望みが薄いと言われたが、医師と家族の必死の介抱で危機を脱した。従兄弟の音楽を毎日聴いて音楽に関心と興味を持ち、休養と活力の源泉となった。一家はメレルの健康回復のため高原の大自然の中で伸び伸びと育てるためアリゾナのフラグスタッフという田舎町に移住した。メレルはこの地の荘厳で美しい自然の中で靈感を養い、絵画や詩作などの芸術的天分を育てる事ができた。また、子供たちの教育のため

に一家は、コロラド州デンバーに引越し、イーストデンバー高校へ、1900年にはコロラド大学で学んだ。メレルはここで音楽と絵画の総合作用で少年時代から抱いていた建築への夢をかきたてられた。大学のチャペルにあるパイプオルガンを弾くことを許された。

(3) 大学のYMCA活動と海外宣教へ

彼は建築家を志す青年でしたが、カナダのトロントで外国伝道を行っていた宣教師ハワード・テイラー女史の講演に霊的信仰的体験を受け、長年思い詰めていた建築家となる夢を放棄してまで、一信徒として外国伝道にその身を捧げる決意をした。

運命に導かれて日本の横浜に降り立った25歳の米国人青年ヴォーリスは、滋賀県立商業学校の英語教師となるが、地元の人にキリスト教布教に反感を抱かれ、2年で教師を解任された。その教え子の吉田悦蔵はYMCAの一室で真剣に折っているヴォーリスの姿に打たれ、解任に同情し、ヴォーリスが手がけた各種の事業に協力する者となって彼の生涯の転機でもあった。ヴォーリスはどんな困難に見舞われようとこの地に留まり続けた。

太平洋戦争当時、開戦の気配が濃くなり多くの外国人が日本を離れる中でも、自らの意志で日本への帰化を選択。一柳米来留と改名し、生涯を閉じるまでこの地に留まることを選んだ。最初、誰一人として知り合いの無かったこの国で、彼は多くの協力者を得て、多岐に亘る活動をした。

建材やオルガンの輸入、メンソレータム(現メンターム)の販売などを行なった「近江セールの創立。私立として日本初の結核療養所であり、疎外されていた結核患者を救い続けた「近江療養院」の開設。小さな保育施設から始まり、幼稚園から高等学校にまで及ぶ教育活動「近江兄弟社学園」の設立。

そのほか図書館の運営、出版など多くの文化事業を行い、建築においては住宅から学校、教会、百貨店、ホテル、オフィスまで幅広く手がけ、戦前だけで1500件の数を数えた。

これら事業の全ては収益を目的としたものでなく「様々な職業を通じて、人間生活の基準となるような、キリスト的生活を徹底的に実践する事」を目指す、彼の伝道そのものであった。

建築活動は彼の伝道を支える経済基盤として始まったが、彼独特のクリスマスチャン・マインドによって率いられた建築事務所

が生み出した建築物は、温かい人柄が香り、その魅力は長い年月を経た今も多くの人の心を捉えて離さない。

その作風は建築家の自己主張より、依頼者の求めに相応しい様式を選択、その応用と近代的な改善を施す事に努め、住み心地が良く、健康を護るに良い、能率的建物を目指した。

彼が64歳、終戦の9月、当時軽井沢のヴォーリスのもとに近衛文麿公の使者が訪れて連合軍総司令部(G・H・Q)への仲介を依頼し、彼が当時の横浜のGHQキャンプへ赴いた話は終戦秘話として知られているが、これの真相については未だ不明の点もある。

日本のためにささげ、生涯愛し続けた近江八幡の地で83歳の生涯を終え、安らかに眠っている。彼は近江八幡市名誉市民第一号で、葬儀は近江八幡市民葬、近江兄弟社社葬の合同で行なわれた。政

府叙勲として社会福祉、建築に貢献した藍綬、黄綬が贈られている。

